

日本消化器外科学会雑誌編集後記

本年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震に際し、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々へのお見舞いを心から申し上げます。あまりにも大きな自然災害に原子力発電所事故が重なり、わが国の行く末に不安を覚える今日このごろですが、被災地の復旧・復興をめざし、オールニッポンで取り組む姿勢が見られます。消化器外科医がこのような国家の緊急事態に何ができるかと考えると、自らの小ささを思い知ることにもなりますが、ひとりの人間として、医師として考えられるすべてのことに尽力していきたいと思います。

昨年途中から編集委員に加えていただきました。私が本誌に初めて投稿したのは医師になって数年後のことで、ラット肝転移モデルを用いた実験に関する原著論文でした。20年以上の歳月を経て、このような大役を拝命するとは思ってもよらぬことで、光栄であるとともに身が引き締まります。どうかよろしくお願い申し上げます。

今月号は原著論文が2編と症例報告が19編です。ヨーロッパから発信されたERASについてはすでにメタアナリシスの結果が発表されていますが、わが国ではその有用性についてほとんど検証されていません。「原著は英文で」という考え方を否定するわけではありませんが、欧米でのエビデンスがわが国の大腸癌手術にそのまま適合できるかについて、きちんとまとめ、報告する姿勢は評価できます。胃切除後の骨代謝障害に対するアレンドロネートの有用性に関する多施設共同研究の成果も今後の方向性を示した興味ある内容です。19編の症例報告のいずれも的確な考察がなされており、称賛に値する内容であると思います。「和文誌のトップ」を目指している本誌の編集委員の厳しい指摘に答えられた結果であり、今後もこれらに追随する論文が多数投稿されることを期待いたします。

残念ながら不採用になった論文の著者の先生方は査読コメントや不採用の理由をぜひ参考にされ、次のステップにつなげていただきたいものです。投稿規程に従っていない、不十分な文献検索などは、経験や注意力の問題でもあり、改善の余地があります。私が残念に思うのは、過去の論文からの明らかな「コピー・アンド・ペースト」や、自らのメッセージが全く欠如している論文に遭遇したときです。医学論文は客観的であることは言うに及びませんが、「行間」に著者の「魂」をいれて欲しいと思います。私個人としては、たとえ今は荒削りの状態であっても、磨けば磨くほど光り輝く「原石」を大歓迎しています。

(石田 秀行)

2011年4月1日